

こども防災自然塾

■ 事業のねらい

災害時における適切な行動をとれるようにすることや、避難所での生活を想定した体験活動などを行うことにより、防災意識を高める。



- 実施日 平成24年9月15日(土)～17日(月) 2泊3日
- 参加対象 小学3年生～中学3年生 20名
- 参加実績 参加者：25名
 小3＝2名、小4＝12名、小5＝6名
 小6＝3名、中1＝1名、中2＝1名
 男子＝17名、女子8名(十勝管内・釧路管内)
- 備考 運営協力者：一般4名(講師)、大学生2名、高校生2名
- 備考 活動場所：足寄町(道立足寄少年自然の家)
 協力：北海道「体験の風をおこそう」運動推進協議会、
 池北三町行政事務組合足寄消防署、足寄町、
 北海道立十勝エコロジーパーク、株式会社ムラカミ、
 九州大学農学部附属演習林北海道演習林

1 事業実施の背景



東日本大震災以降、防災教育に国民的な関心が集まっている。文科省は、防災キャンプ推進事業として、災害や被災時の対応等の理解、学校等を避難所とした生活体験などを行い、防災教育の観点に立った青少年の体験活動を推進している。また、2012年度から順次全面実施されている新学習指導要領において、学校教育における自然体験活動など各種体験活動の充実が求められている。こうしたことから、本事業は、参加者の「生きる力」を引き出し、様々な課題や困難に立ち向かっていく力を養うため、災害に関する理解を深め、キャンプや炊飯などの災害時を想定した体験活動をととして他者とコミュニケーションを図りながら、仲間と助け合う豊かな人間性をはぐくむとともに、災害時において適切な行動をとれるようにすることを目的として実施するものである。

2 プログラムデザイン

	10		11		13		15		17		19		21		22	
9/15 (土)	受付 10:00		開 会 行 事	ア イ ス ブ レ イ ク	昼 食 (持 参)	講 演「被 災 地 の 実 際」 演 習「応 急 処 置・救 助 法」	サ バ イ バ ル キ ャ ン プ Ⅰ ①ロー プ ワ ーク・テ ン ト 設 営 ②水 の ろ 過・薪 割 り・火 起 こ し 体 験 ③サ バ イ バ ル ク ッ キ ン グ Ⅰ ④ナ イ ト ウ ォ ー ク		就 寝 準 備		就 寝					
9/16 (日)	起 床 ・ 洗 面	清 掃 ・ 準 備	エ ン ト 朝 撤 食	テ ン ト 撤 収	フ ィ ー ド ワ ー ク ①気 象 観 測 ②簡 易 天 測 ③自 然 観 察 な ど	エ コ ク ッ キ ン グ ①電 気 を 使 わ な い ク ッ キ ン グ ②粉・缶 詰 を 使 っ た ク ッ キ ン グ	サ バ イ バ ル キ ャ ン プ Ⅱ ①日 用 品 活 用 法 (ダ ン ボール・ ゴミ袋) ②サ バ イ バ ル ク ッ キ ン グ Ⅱ (グ ル ー プ 創 作 料 理) ③避 難 所 生 活・宿 泊 体 験		就 寝 準 備		就 寝					
9/17 (月)	起 床 ・ 洗 面	清 掃 ・ 準 備	非 常 ク ッ キ ン グ 食	学 ん DE 災 害	入 屋 浴 食	閉 会 行 事	14:00 終了 ※期間中、「防災グッズ」の展示も行います									

■ アクティビティについて

■ 意図

- キャンプや炊飯などの野外体験活動をととして、災害時において適切な行動をとれるようにするとともに、仲間と助け合う豊かな人間性をはぐくむ。
- 災害に関する知識を学ぶとともに、災害時における避難所での生活を想定した体験活動をととして、防災意識を高め、たくましく生きるための「生きる力」をはぐくむ。

■ 留意事項

- 参加者が、災害から自分たちの命を守る力を身に付けるために必要とされる「学習」、「想定」、「訓練」の3要素を活動プログラムに組み込んだ。
- テント泊では、事前の実地踏査を含め綿密なテント設営計画を策定し、外部からの不審者や大型野生動物の侵入を防ぐように努めた。
- アウトドアクッキングでは、火や調理器具を安全に扱うように指導した上、各班のボランティアスタッフをととして、けがの未然防止に努めた。



3 活動の様子



■ 当日の様子

初日は、伝言ゲームや防災クイズなどの仲間づくりゲームの後、東日本大震災の被災地支援活動に携わった足寄町消防署の葛西信之氏を招き、講演と止血法の演習を行った。津波が引いたあとの町の様子や、避難所生活を写真で紹介。子どもたちは、被害の大きさを深刻な表情で見つめ、時には驚きと哀しみの声をあげ、防災意識を高めた。

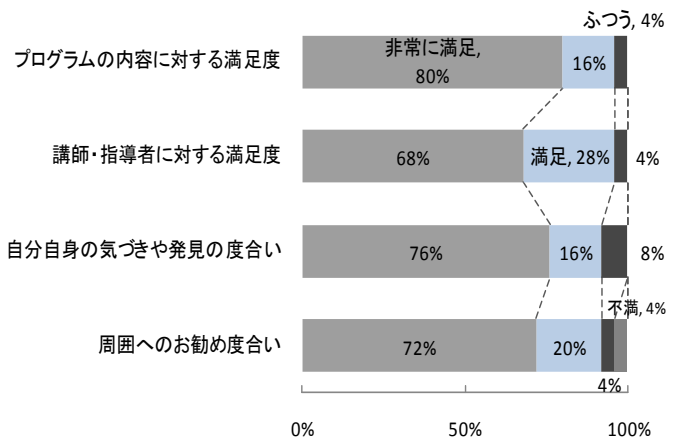
この後子どもたちは、災害発生当日を想定して野外で過ごした。帯広のボーイスカウトの指導者から、電気やガスがない中で、水のろ過や薪割り、火起こし、飯ごう炊飯の仕方などを学んだ。また、暗闇の中を避難するナイトウォークを体験し、仲間と一緒にテントで野営した。

2日目は、コッヘルを使って朝食を作った後、雲の色や形から気象観測を行い、午後からは、避難所生活を体験。昼食は、電気が使えないという想定で小麦粉や缶詰等の保存食を使った創作料理、夕食は、畑で取れた野菜を使って創作メニューを考え、仲間と協力しながら炭を使って野外炊飯に挑戦した。また、新聞紙やペットボトル、段ボールなどの日用品を活用し、食器やテーブルを作成。夜は加工した段ボールをついたてにしてプレイホールで一晩を過ごした。

3日目は、缶パンやお湯を入れるエビピラフ、五目御飯等のアルファ米など非常食を体験。道教委が作成した「学ん DE 災害」の教材を使って災害について学習し、3日間のサバイバルキャンプを終えた。

■ 参加者の声

- 参加者の変容については、右グラフのとおり。
- 活動についての感想
 - 「まきわりは、物を使うのがいがてだったから不安だったけど、うまくできたから楽しかった。」(小4)
 - 「今回学んだことを家族に教えて、何かあった時のために覚えておきたい。」(小5)
 - 「避難所生活でちょっとあつかったり、いたかったりしたけど、被災地のみなさんはこんな生活を毎日おこなっているからぼくはとてもいい生活をおこなっていることがわかった。」(小6)
 - 「非常食やサバイバルクッキングなど、実際にガスや電気が使えないときにどうすればいいのかわかった。」(中2)



4 事業評価

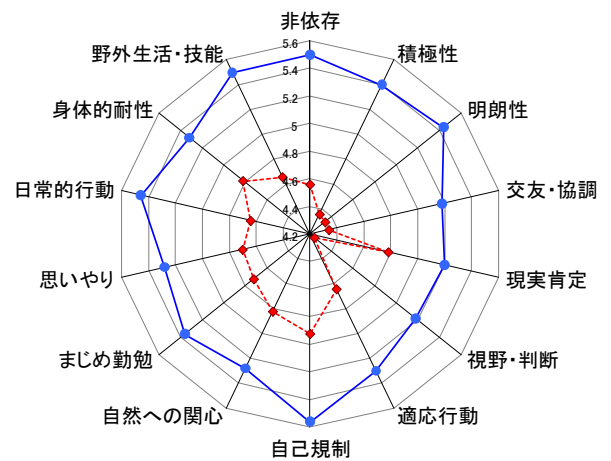
■ 参加者の変容【I K R調査結果】

全ての項目で、事前調査の数値を大きく上回り、全体としては、0.74ポイントの向上的変容が見られた。数値の伸びが大きい項目は、順に「明朗性」(1.1)、「積極性」(1.04)、「非依存」(0.94)、「視野・判断」(0.94)、「交友・協調」(0.84)等の心理的社会的能力及び、「野外生活・技能」(0.84)、「日常的行動」(0.82)等の身体的能力であった。

■ 結果の分析・考察

心理的社会的能力の項目がどれも大きく向上したのは、災害時を想定した活動における「自助」「共助」の精神を大切に結果によるものと推察する。グループの仲間と一緒にテントを設営したり、アウトドアクッキングをするなど、仲間と協力して活動する場面をたくさん設けたことが、数値を上昇させたものと考えられる。

また、アウトドアでの体験活動をはじめ、薪割りやクッキング等におけるナタや包丁、缶切り等の刃物を使う体験活動が、「野外生活・技能」を大きく向上させ、協力し合う集団体験活動を多く取り入れたことが、参加者にとって効果的なプログラムになったと考察する。



5 まとめ



■ 成果

- キャンプや野外炊飯、ナイトウォーク、フィールドワーク等アウトドアでの自然体験活動を多く取り入れたことから、開放的な環境の中で仲間と自然に交流を図ることができ、無理なく慣れ親しむことができた。
- 災害時を想定して「共助」の精神を重視し、グループ活動を多く取り入れた。そのことによって、他者と共同するためのコミュニケーションを促進するとともに、仲間と助け合い協力する態度を養うことができた。また、集団における責任感が生じた。
- 防災力を高めるために、「学習」、「想定」、「訓練」の3要素を様々な活動プログラムに組み込んだ。そのことによって、災害や防災に関する知識を深め、防災意識が高まった。さらに、科学的な思考力が養われ、様々な課題を分析し、対処して能力が高まった。

■ 課題・今後の方向性

- ねらいに沿った事業を展開することはできたが、新規参加者が多かったことや季節はずれの厳しい暑さにより、参加者の行動がスムーズにいかない場面が見られた。また、キャンプ初心者、ナタや缶切り等の道具を初めて使う参加者が予想以上に多く、不慣れた活動のために忙しいスケジュールとなってしまった。参加者の健康管理の面から、アクティビティを精査するなど、ゆとりの時間の創出も必要である。